

# 北極域研究船利用計画ワークショップ開催概要

主催：北極環境研究コンソーシアム（JCAR）・北極域研究船利用計画ワーキンググループ

日時：2020年6月4日（木） 13時30分～17時15分

形式：事前登録制によるオンライン開催（ZOOM）

参加者数：産学官の関係者約130名（最大接続数134）

内容：

- ① 開会、趣旨説明
- ② 北極域研究船の検討状況説明
- ③ 各研究テーマに係る観測計画の発表（10テーマ＋1テーマ）※発表者は別表参照
- ④ 総合討論
- ⑤ 閉会

主な意見：

【共通事項・利用計画について】

- 研究コミュニティを広く巻き込んだ運用体制を構築してほしい。
- 物質循環などの様々な研究テーマにとって、結氷期から融解期にいたる春季の観測が重要であり、国際的にもこれからのので我が国の強みにできる。研究船とアイスキャンプなどの複数手段を組み合わせることも有効。

# 北極域研究船利用計画ワークショップ開催概要

主な意見（続き）：

【各観測計画について】

（中部北極海の古海洋復元 & 北極海の構造発達史復元）

- ゆくゆくは地殻構造探査も実施したい。地下構造の詳細を理解するためには、試料と地震波探査データが必要。

（北極海における船舶運航の安全性と経済性の向上）

- 氷盤の運動は船の安全の観点でも重要。これまで氷盤のサイズはあまり測られてこなかったの  
で船の安全性や経済性の観点からも計測してほしい。

（氷海域における観測体制の確立）

- Sea trialは氷海で行うはずなので、オホーツク海で実施すれば領海内ということもあり良いのではないか。船員のトレーニングとしてはもちろん、サイエンスとしても重要。

（人文社会科学のフィールドとしての北極域・研究船）

- ジェンダーについては、乗船時の考慮だけではなく研究船の運用などの意志決定の過程にも女性が関与していくことが重要。

（船舶搭載全天イメージャーによるオーロラ・大気光の観測空白域の解消）

- 北米の地上観測データと関係できるようにロシアの高緯度側や地上観測点が少ないところで観測できると価値が高い。

# 北極域研究船利用計画ワークショップ開催概要

分野	発表テーマ	発表者
海洋・海氷	北極海の季節変動観測	溝端 浩平 (海洋大) 田村 岳史 (極地研)
海氷・波浪	太平洋側北極海の開放水面、氷縁域、多年氷域における海洋・波浪観測	早稲田 卓爾 (東大)
物質循環	“Polar morning”における大気－海氷－海洋間のフラックス観測	川合 美千代 (海洋大) 野村 大樹 (北大)
海洋生態系	生態系観測を含む太平洋側北極海の総合観測	西野 茂人 (JAMSTEC) 松野 孝平 (北大)
気象・気候	氷海域における観測体制の確立	猪上 淳 (極地研)
数値モデル	気候モデルによる海氷予測精度向上を目指した北極海縦断観測	渡邊 英嗣 (JAMSTEC)
古海洋	中部北極海の高海洋復元	山本 正伸 (北大)
テクトニクス	北極海の構造発達史復元	佐藤 暢 (専修大)
船舶工学	北極海における船舶運航の安全性と経済性の向上	松沢 孝俊 (海技研)
人文社会	人文社会科学のフィールドとしての北極域・研究船	礪波 亜希 (筑波大) 大西 富士夫 (北大)
	船舶搭載全天イメージャーによるオーロラ・大気光の観測空白域の解消	坂野井 健 (東北大)

# JCAR北極域研究船利用計画WGメンバー

2020年8月19日現在  
五十音順

	氏名	所属	分野	備考
1	赤根 英介	JAMSTEC	海洋観測研究計画	幹事
2	猪上 淳	極地研	気象学、大気海洋相互作用	
3	大西 富士夫	北大北極	国際政治学	
4	川合 美千代	東京海洋大	化学海洋学	
5	佐藤 暢	専修大経営	地質学、海底岩石学	
6	田村 岳史	極地研	極域海洋学・海氷衛星リモートセンシング	
7	礪波 亜希	筑波大	国際政治経済学	
8	西野 茂人	JAMSTEC	みらい北極観測（海洋物理・化学）	
9	野村 大樹	北大水産	海氷生物地球化学	
10	松沢 孝俊	海技研	氷海工学	
11	松野 孝平	北大水産	プランクトン、海洋生物	
12	溝端 浩平	東京海洋大	衛星リモートセンシング、海洋物理	
13	山口 一	東大新領域	海氷予測	座長
14	山本 正伸	北大地球環境	古海洋学	
15	早稻田 卓爾	東大新領域	海洋波	
16	渡邊 英嗣	JAMSTEC	極域海洋学・数値モデリング	